

隨泉寺寺報

平成 26 年 (2014 年) 11 月号 第 531 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

後期門信徒講座

講師 住職自修

講題 『領解文のころ』

■役員研修会 ～映画『東京家族』～

今回は午前中はいつも法座の最後に唱和する、『領解文』を勉強します。蓮如上人が、お手本としてお示ししてくださいました「ころ」をあじわいます。

午後からは小津安二郎の『映画』名作「東京物語」の舞台を現代に移し、老夫婦と子どもたちの姿をじて、家族の絆と喪失、夫婦や親子、老いや死についての問いかけを描く『東京家族』を鑑賞します。

山田監督は「家族というのは、厄介で、大変煩わしいもので、無くてもよいと思うこともあるのだけれど、やはり切り捨てられない問題。そのつらさを何とか切り抜けていかねばならない、そのためにドタバタする、そんな滑稽で不完全な人間を、懸命に表現したい」と語り、それを見た観客は、「ああ、ダメなのは自分だけじゃないんだな」と安心して笑ってしまう。おかしくて、悲しい、これは私の、あなたの物語です。



11月の法座予定

- 11月 2日 …… 本部役員会
- 11月 9日 …… 掃除 平原東
- 11月 15日 朝席午前10時より …… 役員研修会 おとぎ
- 11月 15日 昼席午後1時より …… 門信徒講座 映画『東京家族』
- 11月 16日 午前 9時より …… 竹やぶ伐採 役員
- 12月 2日 午後4時より …… 門信徒会本部役員会 忘年会

☆ インド紀行 ④ 若院

2月28日はネパールを出国し、お釈迦様の入滅の地であるクシナガラへと向かいました。

お釈迦様は35歳の時に悟りを開いてからの約45年間の布教活動を行い、80歳の時にこのクシナガラで涅槃に入られました。

ここには1972年にビルマ(現在のミャンマー)の仏教徒によって建てられた涅槃堂があります。堂内には5世紀末ごろに作成されたと言われる6メートル程もある大きな涅槃像が台座の上に安置されていました。

台座にはお釈迦様の入滅に立ち会ったとされるアーナンダ(阿難)という弟子が悲しんでいる姿が刻まれていました。この涅槃堂は参詣者が絶えない場所であるようで、いつも溢れんばかりの人がいたり、堂内でお勤めをする仏教徒がいるようなのですが、私たちが訪れた時には貸切状態なぐらい人が少なくとても静かな雰囲気です。参拝することができたため、お釈迦様に「しっかり私のところにもお釈迦様の教えが届いていますよ」というお礼の思いを込めて参拝させていただきました。



涅槃堂から少し離れた場所に茶毘塚というお釈迦様が火葬された場所へとお参りさせていただきました。当時、お釈迦様が茶毘に伏された後にお釈迦様の教えを受けたことのある国々から仏舎利を分配して欲しいとの依頼がきたのですが、クシナガラの国の人々はこれを拒否したそうです。その事により紛争が起こるにまで発展してしまっただけでなく、ドローナというバラモンによって当時の八大王国へと平等に分配されることになったのです。



お釈迦様の舎利をめぐって国を挙げての戦争が起こりそうになるほどに、当時のお釈迦様への人々の崇拝の気持ちや仏教を大事にされていたインドの人々に思いを馳せてみると、仏教がどれほど人々の生活に影響を与えて、その教えの中に深い安心感を与えていたのかと実感しました。仏教の教えはそのような人々によって守り伝えられてきたからこそ、今の私に届いてくださっているんですね。

仏教を守り伝え続けてくださった方々にも改めて感謝しながら仏蹟参拝しなければならないな、と強く感じました。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 久保 喜久江殿 故 久保 久男様 特 永代経志として
永代経懇志 金 拾萬円 南井 恒則殿 故 南井みどり様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 久保 喜久江殿 故 久保 久男様 香典返しとして

浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著 「あけぼのすぎ」

-- 浄土真宗一口法話 --11月

「幸いを求めて弥陀を信ずるのではない」 (毎田周一)

私たちは幸せを求めて、日々、過ごしています。ごく、当然のことでありましょう。

昔の人は、家内安全、無病息災などと言いました。健康で長生きしたい、争いごとのない平和な暮らしをしたいというのは、時代を超えた願いです。

しかし、それはなかなか実現しません。もし、一部が実現しても、私の幸せは、他の人を幸せにするとは限りません。試合に勝ったら、相手は負けだという場合は言うまでもありませんが、私の病気が治ったというだけで、他の病人を羨ましがらせる場合もあります。

ここで、気付くことは、人間の幸せには限界があるということではないでしょうか。阿弥陀如来さまの願いは、もう一つ広く大きな世界、おさとりの世界から、幸せであるろうと、なかろうと、喚び続け、支えていてくださいます。お念佛申しつつ、限りある私であるという自覚のうえに、共に歩ませていただきましょう。



11月 東井 義雄師

自分の荷は自分で背負う たった一度の人生だから

私の娘は、幼い頃、九十九パーセントまでだめだといわれるような大病を何回も患いました。全く全く不思議に、いのちを助けていただいたのですが、幼い体に何百本も注射を打っていただいた体です。

学校に上がらせてもらうようになって、一番つらかったのは運動会でした。みんなから何十メートルもおくれて、ドタン、ドタン、デブの娘が走っているのを見るのは、



ほんとうにつらいことでした。私も師範学校に学んだ時、マラソン部で、四年間、毎日ビリッコを引き受けて走った男ですから、ビリのつらさは誰よりも身に沁みて知っているつもりですが、娘のビリを見るつらさは、自分のビリのつらさの比ではありません。妻など「あんな姿を見せものにするなんて残酷すぎます。先生にお願いして、徒走競技だけは赦して

てもらってください」と泣いて訴えるのでした。

でも、私はその願いをしませんでした。私がビリッコの中で得難いものを学ばせてもらったように、娘にも、ビリッコを背負うことによってのみ学べるものを学んで欲しかったからです。ですから、私がビリッコの中で学んだものを何かの機会にさり

気なく話して聞かせたり、「きょうのおまえのビリッコは涙がにじんで仕様がなほど立派だったぞ」と励ましてやったりすることによって、ビリッコを背負い ぐ生きざまを育てようと願いました。

娘は、戦後の物の不自由なさ中で学校生活を送りましたが、「お父ちゃん、今度も靴の配給のくじがあたりませんでした」「あたってほしかったな、足の指が全部出てしまっているんだからな」「でも、わたしにあたらたら人にあたらないでしょ。わたしはがまんできるから、がまんのできない人にあたった方がよかったんだと思います」などと、配給のあたらなかった事実をぐずぐずいわないで背負って生きる生き方を見せてくれることもありました。

私の所は辺地ですから、高枚は寄宿舎に入舎させました。日曜日、寄宿舎に帰っていったと思ったら、すぐ手紙をよこしました。「きょう、数学の答案を返していただきました。予想していたのよりよい点がついており六十点です。おかしいなと思って調べてみると、一つ、まちがいが正答になっています。

私は黙ってしようかなと思いました。だって先生にそれを言えば、六十点でもよい点ではないのに、この点から二十点も引かれてしまいます。それは、わたしにとってほんとうにつらいことです。でも、わたしは、思いきって先生に申し出ました。先生は、これでののだと強くおっしゃっていましたが、私が精しく説明すると、ほんとだね、といって四十点と訂正してくださいました。そして『正直だね』とおっしゃいました。わたしは、バツと顔の赤くなるのを感じました。だって、わたしは、ずいぶんこのまま黙ってしようかと考えたんですもの。でも、もうちょっとのことで、二十点どころではない汚点を、わたしの人生につけてしまうところでした。お父さま、お母さまのおかげで、まちがいを犯さないうですみました。お父さま、お母さまも、きっと喜んでくださることと思います」という手紙でした。

私は、娘が、親譲りの頭の悪さを、ごまかさないで、堂々、背負おうとしてくれているのが嬉しくてなりませんでした。百点をとってくれたことより嬉しいと思いました。

自分の荷まで他人のせいにしてブツブツいう背負い方だけは育てたくないと思います。ただ一度の自分の人生なのですから。

☆研修旅行



10月3日江田島市の深江 宗頭寺(西山住職)と沖美の専念寺(寺尾住職)飛渡瀬の妙覚寺(長坂住職)の三か寺に総勢43名で、研修旅行に行ってまいりました。

天候にも恵まれ、どのお寺も歓迎していただき、楽しい旅行でした。

昼食も大変なご馳走で感激いたしました。また来年も楽しい企画を考えます。

